

「今からヤキニク帝国の王子。ハラミ王子の処刑をはじめる」

偉大なるクリスマス国王が宣言をする。野蛮な国のように楽隊が太鼓を連打して盛りあげるようなことはしない。人間の命を抹消することは娯楽ではないのだ。それは悲しい出来事だ。できればやりたくない。義務としてしゅくしゅくと行うべきものなのである。

通常では、国王の宣言後、王子はすぐに死刑執行をする。しかしモンブラン王子は動かない。岩のように動かない。山のように動かない。島のように動かない。

どうしたのか？

なにがおきているのか？

数秒が三十秒。

三十秒が一分。

クリスマス国王の目にとまどいの色が現れた。すこし離れたところにいるモンブラン王子にアイコンタクトを送る。目を合わせてくれない。うつむいたままだ。孤独なランナーのようだ。群衆の中にかすかなざわめきがひろがる。

ハラミ王子がなにかいってる。モンブラン王子は彼の顔を見る。小さすぎて声は聞こえなかったが、くちびるの動きでなにをいってるかはわかった。

「.....魔法を信じていましたよ」

「ごめん」

モンブラン王子はハラミ王子をクリームの上に突き落とした。

クリームまみれになるハラミ王子。こっけいな姿だ。罰ゲームのように見える。しかしこれは処刑だ。クリームの深さは腰くらい。ガラスの壁は高すぎる上にすべるので登れない。甘い甘い。生クリームの味と香りが口中に広がる。鼻からも耳からも入る。ハラミ王子は、壮絶なゲロが口から噴出するのを待った。

「ん.....ん？」

なにもおきない。むしろ、沸き起こったのはおどろきだった。ハラミ王子は今の今まで、生クリームは大の苦手.....と思いこんでいた。ちがった。

「うっ.....うまい」

なんということだ。国家戦略と洗脳教育によって、自分は辛党だと思いこんでいたのだ。

「今はじめて気づいたが、ぼく、甘いのが大好き」

あたりまえだがヤキニク帝国では、甘いものを食べる機会はない。だから自分も、甘いものは大きらいだと思いこんでいたのだ。それともうひとつ。自分の〈生きにくさ〉の原因がわかった。ハラミ王子は、王族という恵まれた身の上ではあったが、ヤキニク帝国では自分の居場所がどこにもないように感じていた。

居心地が悪い。内向的な性格のせいだろうとは思っていたが.....ヤキニク帝国では〈元気〉で〈男らしい〉マストラオぶりが好まれていた。もしかして〈自分は潜在的なゲイなのではないか〉と疑ったこともあるが、どう考えても男より女のほうがずっと好きだった。

ああ。

この生きにくさの原因はなんだ？

自分が甘党だったからである。甘いもの大好き。潜在的であり本人ですら気づいていない要因だったが、甘党などはひとりもない国で、居心地が悪いのはとうぜんのことだろう。

「天国.....天国.....」

ハラミ王子は生クリームの海に、無邪気なラッコのようにぷかりぷかり浮かびながら、生クリームを貪り食っていた。いくら食っても食い切れない。しかも、ここはヤキニク帝国ではないから怒られない。暴力的な兄や国王の父親もない。

「自分のはじめてほんとうの自分になることができた。ありがとう」

ハラミ王子はガラス越しにのぞいているモンブラン王子に声をかけた。

どうして受刑者をこんな幸せにさせて処刑になるんだろう.....

ハラミ王子は考えた。なにごとも甘っちょろいケーキ王国のことだから、処刑もほんとうは処刑じゃなくて、脅かすだけの刑なのかもしれない。または、ヤキニク帝国の人間は、生クリームが大きいらだから〈飛びこんだ途端にショック死する〉と考えていたのではないか。これもありうる。

そうすると、もう処刑自体はすんだのだから、てきとうな時間がたったら釈放されるのではないか。そうなったら、もうヤキニク帝国にはもどらないで、ケーキ王国に住もう。ヤキニク帝国からすると裏切りものみたいに見えるかもしれないが、甘党なんだからしかたがない。

ケーキ王国は野党が認められているそうだから、〈ヤキニク平和党〉というのを作って、ケーキ王国とヤキニク帝国のあいだの平和を推進する運動をするのがいいかもしれない。そうだ、政治家になろう。ぼくはわりと策略家なので、向いてると思う。あと、モンブラン王子とは親友になれるだろう.....これだけは保障ができる。

あいつはいいやつだ。

だがモンブラン王子は、ハラミ王子の呼びかけには答えなくて、真っ青な顔で震えたままだった。岩のように。島のように。無生物のように固まっていた。

これ以上、傷つきたくないのだ。

かわりに隣に立っていたイチゴ姫がいった。

「あら、けっこう楽しそうじゃない。お兄様、処刑だなんておどろかせて、いけずね。安心したわ。ほんとうはちいとも残酷じゃない刑罰だって知っていたのね。やっぱり、わたしの愛するお兄様だわ」

しかしモンブラン王子は返事をしない。顔をこわばらせたまま、重い足取りで去っていく。もし幻視者がそこにいたら、背中に重い十字架を背負っている姿が見えたことだろう。手の傷跡から血を流す.....足の傷跡から大量出血。

おれの全身が血みどろだ。

ほんとうに地獄なのはここからだった。

ハラミ王子はそんなに愚かな人間ではなかった。だから、食べられない生クリームを一気食いついて、お腹をこわすことを警戒した。腹八分目で我慢する。気が小さいので慎重なのだ。水槽の中で嘔吐したり、下痢便をたれたら、たちまち地獄の惨状になることだろう。

数日たったならここから出してくれるのではないか？

処刑自体は行われた。ただ効果がなかっただけだ。今はケーキ王国の官僚で会議をしているところではないか。

この先どうするか.....

きっとモンブラン王子はぼくを擁護してくれているはずだ。

『処刑はしたんだから、あとは釈放するしかないでしょう』

と力説してくれてる彼の勇姿が目に見えるようだ。

甘い香りに誘われてきた一匹のショウジョウバエが生クリームの中に落ちた。小さい。体長は二ミリくらい。ハラミ王子は、気がつかないでショウジョウバエごと生クリームを飲んだ。

数日たってもハラミ王子は釈放されなかった。さいわい、腹痛はない。頭痛もない。しかし膀胱が限界だった。大便も。我慢の限界。じっとしていても、脂汗がたらたら出てくる。

いちばんの敵は猛暑だ。記録的な猛暑らしい。原因はなんだろうか。ドリームランドに異変が起きてると、キチガイ科学者--と呼ばれている老人がいる--は主張していたが真偽は不明である。

「生クリームが腐りだした！」

ハラミ王子はこの刑のほんとうの恐ろしさに気がついた。気がつきたくなかった。さくっと首でも吊ったほうがよほど人道的であろう。腐りだした生クリームの劣化ははやい。水槽の中がすっぱいにおいであふれてくる。

「腐敗臭！」

「腐敗臭！」

甘党だろうが辛党だろうが、どんな人間でも腐ったものだけはきれいであろう。しかも、それだけではない。

自分がその中の一部として、いっしょに腐りだしてるとしたら.....？

どんな気持ちがすると思いますか？

「もう我慢ができない！」

絶叫したハラミ王子は、ズボンとブリーフを脱いで小便を出した。紳士階級なので、ズボンの中でもらすことはできなかったのだ。

じょんじょろり。

じょんじょろり。

数日間我慢していた小便が〈男の潮吹き〉のようにあふれでる。ついに臨界点をこえた。ぼくの肛門がメルトダウン。

ぶり.....

ぶりぶりもりもり。

ちょっとした快感があった。ハラミ王子の小さなお尻の穴から、おどろくほどのたくさんのウンチが出た。出てきた糞便は、酸っぱくなった生クリームと混じりあう。

混沌。

くさい。

くさくないわけがなかるう。〈腐敗した生クリーム〉と〈数日間つまっていたウンコと小便〉のにおい。これらが合流すると地獄のような香りをはなった。くさすぎるものは、よい香りに似ている。地獄香水とでもいうべきか。そのにおいは死を暗示していた。たぐいまれな悪臭によって、地獄の門は開かれり。もっと簡単にいうと.....

くさすぎて死ぬ。

「ぐわっぐわっはあ」

直球でいきなりウジ虫を産みつけやがる。なにを考えてるんだ、お前？ いやすぎる.....あまりにもいやすぎる生態だ。

ハラミ王子はその不愉快さを生身の肉体をもって体感した。こんな過酷な経験をした人間は世界でも数少ないだろう。

また一匹ギンバエが飛んできた。腐った生クリームにウジを産む。浮かんでいるウンコにウジを産む。小便はもう腐敗の海に溶けこんで、区別がつかない。ハラミ王子にもウジを産む。絶叫をあげて動いている。数日前までは、暴れていた。はげしく動いていると、どの種類のハエも、卵やウジを産み付けられない。今はただ動いているだけだ。一般人より生命力の強い、ステキー国王、トントロ王子、ハラミ王子の家系にわざわざあれ！

ハラミ王子はまだ生きています。腐ったまま生きています。好きなようにウジ虫を産み付けられています。

さらに数日。〈腐敗の海〉は〈ウジの海〉になっていた。ハラミ王子もその一部だ。お尻の穴、尿道、ふたたび穴が開いてしまったヘソの穴、目、口、鼻、耳の穴。すべての穴からウジ虫が侵入してきた。ハラミ王子は生きています。

どうして死なないのか？

こんなに苦しいのに、どうしてぼくは生きていますのか？

この世に神はいないのか？

いないとも！

ドリームランドに神という概念はなかったからである。

「うべえ～。うべえ～」

水槽のガラスの向こうから、ハラミ王子がモンブラン王子を見てなにかいっている。発狂はしていないようだ。視線にまだ知性を感じる。はやく、発狂してくれないか。モンブラン王子は念じた。

〈狂え〉

〈狂って死んでくれ〉

死刑囚が死に絶えるまで、毎日見守るのも王族の王子の役目だった。こんなつらい役目を一般人にまかせるわけにはいかない。尋常ならざるタフな精神の人間でなければ、一生、心に傷をおってしまうからだ。

ケーキ王国では王族は強い〈権利〉をもっているが、それ以上にきびしい〈義務〉を負わなくてはならない。それだからこそ、国民は王族を手放しで〈称賛〉するのだ。

〈あの方々は我々がぜったいに背負いたくない任務をおこなってくれる〉と。

大広間のドアの前にイチゴ姫が立っていた。モンブラン王子と、永遠に悲鳴をあげつづけている、腐ったハラミ王子の入った水槽を見ていた。

ハラミ王子は苦痛で発狂しそうになっている。

モンブラン王子だって精神的苦痛で狂いそうになっている。

イチゴ姫も精神的な混乱で混沌の海に投げだされていた。

腐りきってウジだらけなのは、ハラミ王子の海とあまり変わらない。